勝ち方と負け方（昭和13年6月26日、本因坊秀哉の引退碁、打ち始められる） - 今日の馬込文学／馬込文学マラソン

・（右）の引退碁の様子　左が挑戦者の 七段。対戦初日（昭和13年6月26日）、海外に紹介する写真を木村伊兵衛が撮影。この写真だろうか？　※「パブリックドメインの写真（[根拠→](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/etc_new/tyosakuken.html)）」を使用　[出典：サイエンスと歴史散歩／碁の名手（本因坊秀哉）の引退碁→](http://kanazawa-sakurada.cocolog-nifty.com/blog/2009/12/20091223-8d79.html)

 http://kanazawa-sakurada.cocolog-nifty.com/blog/2009/12/20091223-8d79.html

昭和13年6月26日（1938年。 84年前の6月26日）、 **「不敗の名人」と謳われた第21世  ・  （64歳）の引退碁**が、「  」（「東京タワー」（東京都港区芝公園四丁目2-8 [map→](https://goo.gl/maps/Zge13EyscggzceYAA%22%20%5Ct%20%22_blank)）の場所にあった会員制の高級料亭。尾崎紅葉の名はここから）で打ち始められました。

挑戦者は、  七段（29歳）。この対局は、「東京日日新聞」が企画し、家元制の最後の本因坊に、リーグ戦を勝ち抜いてきた若手精鋭が挑戦するという、**“権威” 対 “実力”の構図**を持っていました。

秀哉が「不敗の名人」たり得たのは、当時「名人」と呼ばれるようになると、その名に傷がつかないよう「勝負碁」が避けられたからのようです。秀哉がこの10年で打った碁は2局しかなく、その2局とも途中で秀哉が病に倒れるといったアクシデントがあり、結果としては秀哉が勝ちましたが、病に伏している最中、他の棋士からの入れ知恵があったのではとの噂もありました。そんなこともあったので、秀哉はこの引退碁で、“実力者”と正々堂々と戦い、自身の実力を見せようとしたのでしょう。

|  |  |
| --- | --- |
| 秀哉の引退碁を報じる新聞記事。写真は左が秀哉、右上が木谷七段、右下が解説の呉 清源、中央下の丸写真が川端康成　※「パブリックドメインの図版（根拠→）」を使用　出典：『川端康成（新潮日本文学アルバム）』 | 秀哉の引退碁を報じる新聞記事。写真は左が秀哉、右上が木谷七段、右下が解説の 、中央下の丸写真が[川端康成](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/kawabata.html)　※「パブリックドメインの図版（[根拠→](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/etc_new/tyosakuken_3.html)）」を使用　出典：『[川端康成](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/kawabata.html)（新潮日本文学アルバム）』 |

**持ち時間**はそれぞれが40時間という前例のない長さでした（普通は大きな対局でも2日で打ち切り、一日8時間で計16時間がそれぞれの持ち時間。8時間労働の考え方に基づく）。かつては棋士が思うがままに時間を費やして次の一手を考えていましたが、大正時代末頃から持ち時間制が導入されます。時間の制約の中で戦ってこなかった秀哉に配慮して40時間という長時間が設定されましたが、心臓に持病があった秀哉には、この長時間の持ち時間が文字通り“命取り”となります（対局後1年ほどした昭和15年1月18日死去）。

また、公平性を考え、この対局で初めて「**封じ手**」が行われました。これまではが都合のいい頃合いに に打たせてその日の対局を終え、次に打つ日も上手が決めており、上手に大きな有利がありました。上手は次の対局日まで次の一手を存分に考えることができるし、人に入れ知恵される可能性も生じます。そこで、その日の最後の一手を相手に知られないよう紙に書いて封筒に入れて封し、署名して、金庫に保管、次の対局が始まると同時に封が切られ、その一手が相手に明らかになるというやり方（「封じ手」）が採用されました。秀哉の引退碁は、こういった公平性が担保された中で行われ、**真の実力者は誰か**という関心の中で行われたのです（[力道山と木村政彦の「昭和の巌流島」に似ている](https://designroomrune.com/magome/daypage/12/1222.html)）。

1日目は、昭和13年6月26日芝「紅葉館」で黒一から白二（封じ手）までの2手で形だけのもの（[棋譜→](https://designroomrune.com/magome/k/kawabata/photo03.jpg)）。次の日（6月27日）も「紅葉館」で黒三から黒十一（封じ手）まで打たれました（[棋譜→](https://designroomrune.com/magome/k/kawabata/photo04.jpg)）。

3日目は14日後（7月11日）に箱根の奈良屋旅館で打たれました。以後、秀哉が持病の心臓病悪化のため聖路加病院に入院するまでここで打たれます。6日目（箱根での4日目。7月26日）に木谷七段からの痛烈な一手（黒六十九）があってから秀哉も長考するようになりました。

秀哉の3ヶ月の入院のあと、場所を伊豆の「  」（静岡県伊東市竹の内一丁目3-6 [map→](https://goo.gl/maps/RnDGLeygVXkPVqVr6%22%20%5Ct%20%22_blank) [hp→](http://www.dankoen.com/%22%20%5Ct%20%22_blank)）に移し、12月4日に終局。秀哉の5目負けでした。二百三十七手までうち継がれましたが、秀哉の白百三十が失着で、以後はほぼ黒の勝の流れてなっていたようです。

|  |  |
| --- | --- |
| 川端康成 | 榊山 潤 |
| [川端康成](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/kawabata.html) | [榊山 潤](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/sakakiyama.html) |

この歴史的対局の観戦記を担当したのが[川端康成](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/kawabata.html)（39歳）です。 「東京日日新聞」に64回に渡って観戦記を連載し、人気を博しました。秀哉の没後2年ほどたった昭和17年には、この対局を題材にした小説『名人』を書き始めます。[川端](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/kawabata.html)には珍しくかなり忠実な記録小説です。勝敗でいえば秀哉の負けでしたが、去りゆく時代の人の**気高さと哀しみと静けさ**に深く共感して書かれています。**公平とか、勝ち負けとかにこだわることで失われるもの**にも触れられていました。

[川端文学の特徴の一つですが、『名人』も複数の雑誌に12年にも渡って分載されました。初めから終わりまで読み通すことにこだわらず、部分部分を味わへばいいんだと思います。](https://designroomrune.com/magome/daypage/05/0501.html)次のようば表現に出会うことができます。

・・・床の生花の枝がかすかに揺れるほどの微風はあった。庭の滝と早川の瀬音のほかは、遠くから石工ののみの音が聞えるばかりだ。庭の鬼百合の匂いがはいって来る。なにかしらの鳥が、対局室の余りの静かさに、軒端を大きく飛んだ。・・・（川端康成『名人』より）

碁の観戦記を書くくらいですから、[川端](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/kawabata.html)も相当打てたのでしょうが、文壇でともかく碁が強かったのが[榊山 潤](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/sakakiyama.html)。18年間（昭和28～45年）文壇本因坊の座にあったそうです。[榊山](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/sakakiyama.html)はなんせ実家が囲碁将棋クラブを経営していて、幼い頃からクラブを仕切っていた老人より手ほどきを受け、 7～8歳頃には三段の人に三目置かせて（三目の有利を与えて）勝つほどだったとか。昭和36年（60歳）には五段を取得しています。

|  |  |
| --- | --- |
| 川端康成（左）と村松梢風（右）の対局。観戦するは榊山 潤。昭和10年代後半に撮られた写真。川端が『名人』を書きつないだ頃だろう ※「パブリックドメインの写真（根拠→）」を使用　出典：『馬込文士村ガイドブック（改訂版）』（東京都大田区立郷土博物館） | このような、二人（川端（左）と村松（右））の対局中の写真も。村松邸での写真とのことだが、おそらくは鎌倉。川端も鎌倉に住んでいた。村松も秀哉の引退碁を観戦しており、川端の『名人』にもその名が出てくる　出典：『川端康成（新潮日本文学アルバム）』 |
| [川端康成](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/kawabata.html)（左）と[村松梢風](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/muramatu.html)（右）の対局。観戦するは[榊山 潤](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/sakakiyama.html)。昭和10年代後半に撮られた写真。[川端](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/kawabata.html)が『名人』を書きつないだ頃だろう ※「パブリックドメインの写真（[根拠→](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/etc_new/tyosakuken.html)）」を使用　出典：『馬込文士村ガイドブック（改訂版）』（東京都[大田区](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/places_new/ootaku.html)立郷土博物館） | このような二人（[川端](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/kawabata.html)（左）と[村松](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/muramatu.html)（右））の写真も。[村松](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/muramatu.html)邸での写真とのことだが、おそらくは鎌倉。[川端](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/kawabata.html)も鎌倉に住んでいた。[村松](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/muramatu.html)も秀哉の引退碁を観戦しており、[川端](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/kawabata.html)の『名人』にも出てくる　 ※「パブリックドメインの写真（[根拠→](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/etc_new/tyosakuken.html)）」を使用　出典：『[川端康成](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/kawabata.html)（新潮日本文学アルバム）』 |

囲碁は、巷の電子ゲームなどとは違って一度道具を用意すればお金をかけずに一生楽しめるし、抽象性と奥深さがあって、国籍、言語、男女、老若も問わないのもいいですね（[映画「ビューティフル・マインド」に、米国のプリンストン大学院のキャンパスで主人公が学友と囲碁に興じる場面がありました](https://designroomrune.com/magome/daypage/04/0404.html)）。対戦相手がいるので、コミュニケーションツールともなります（一通り打てるようになったら、まずは親戚や近所で打てる人に挑んでみては？）。

ほぼ100%実力の世界なので、碁歴何十年という壮年の差し手でも、十歳にも満たない少年少女に負ければ、頭を垂れるしかありません。**おべんちゃらやカッコつけなど一切通用しません**。電子ゲームばかりしていると終いには親の目がきっと三角でしょうが、囲碁なら大目に見てくれるでしょうか？

やる気にさえなれば、漫画でも学べるし（「ヒカルの碁」 [Amazon→](https://www.amazon.co.jp/%E3%83%92%E3%82%AB%E3%83%AB%E3%81%AE%E7%A2%81-1-%E3%82%B8%E3%83%A3%E3%83%B3%E3%83%97%E3%82%B3%E3%83%9F%E3%83%83%E3%82%AF%E3%82%B9DIGITAL-%E3%81%BB%E3%81%A3%E3%81%9F%E3%82%86%E3%81%BF-ebook/dp/B00AA6MPWU/ref%3Das_sl_pc_qf_sp_asin_til?tag=rune0077-22&linkCode=w00&linkId=4678da3e81cfae40edf64ccca62bc134&creativeASIN=B00AA6MPWU)）、分かりやすい入門書も多数出てますし（『石倉 昇の囲碁入門 〜囲碁の世界へようこそ〜』[Amazon→](https://www.amazon.co.jp/%E7%9F%B3%E5%80%89%E6%98%87%E3%81%AE%E5%9B%B2%E7%A2%81%E5%85%A5%E9%96%80-%E5%9B%B2%E7%A2%81%E3%81%AE%E4%B8%96%E7%95%8C%E3%81%B8%E3%82%88%E3%81%86%E3%81%93%E3%81%9D-%E7%9F%B3%E5%80%89-%E6%98%87/dp/4818206717/ref%3Das_sl_pc_qf_sp_asin_til?tag=rune0077-22&linkCode=w00&linkId=5b297aad429eeeaa65e4f3ea62fb5784&creativeASIN=4818206717)）、気軽に学べるサイトもあります（[「やさしい囲碁入門講座」→](https://yasashiigo.com/)）。あと、[新聞小説同様お忘れの方が多いと思いますが、多くの新聞が毎日囲碁将棋の連載をしています。](https://designroomrune.com/magome/daypage/11/1119.html)部屋の隅に碁盤を置いて、毎日届けられる最新棋譜を並べていって日々研究するのも楽しそう。

|  |  |
| --- | --- |
| 川端康成『名人（新潮文庫）』。題材になった引退碁の棋譜もあり | 内藤由起子『それも一局 〜弟子たちが語る「木谷道場」のおしえ〜』（水曜社） |
| [川端康成](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/kawabata.html)『名人（新潮文庫）』。題材になった引退碁の棋譜もあり | 内藤由起子『それも一局 〜弟子たちが語る「木谷道場」のおしえ〜』（水曜社） |

|  |  |
| --- | --- |
| 桐山桂一『呉 清源とその兄弟 〜呉家の百年〜』（岩波書店） | 『碁苦楽（ごくらく） 』（南北社）。編：榊山 潤。徳川夢声、榊山潤、大岡昇平、高木彬光らの随筆のほか、川端康成、尾崎一雄らが作成した詰碁も |
| 桐山桂一『呉 清源とその兄弟 〜呉家の百年〜』（岩波書店） | 『 』（南北社）。編：[榊山 潤](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/sakakiyama.html)。徳川夢声、[大岡昇平](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/oooka.html)、高木 らの随筆や、[川端康成](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/kawabata.html)、[尾崎一雄](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/ozaki_k.html)らが作成した詰碁など |

■ 馬込文学マラソン：
・ [川端康成の『雪国』を読む→](https://designroomrune.com/magome/k/kawabata/kawabata.html)
・ [榊山 潤の『馬込文士村』を読む→](https://designroomrune.com/magome/s/sakakiyama/sakakiyama.html)

■ 参考文献：
●『名人（新潮文庫）』（[川端康成](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/kawabata.html)　昭和37年初版発行　平成24年発行42刷参照）P.34、P.44-45、P.48-49、P.53、P.78-80、P.93-94、P.164-167　●『[川端康成](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/persons_new/kawabata.html)（新潮日本文学アルバム）』（昭和59年発行）P.42-45　　●『馬込文士村 〜あの頃、馬込は笑いに充ちていた〜（特別展カタログ）』（制作・発行：東京都[大田区](https://designroomrune.com/magome/smallbooks/places_new/ootaku.html)立郷土博物館　平成26年発行）P.47

■ 参考サイト：
●ウィキペディア／・[紅葉館（令和2年3月19日更新版）→](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E7%B4%85%E8%91%89%E9%A4%A8&oldid=76669551)　・[本因坊秀哉（平成30年6月5日更新版）→](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E6%9C%AC%E5%9B%A0%E5%9D%8A%E7%A7%80%E5%93%89&oldid=68794357)　・[木谷 實（平成30年8月19日更新版）→](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E6%9C%A8%E8%B0%B7%E5%AF%A6&oldid=69636796)　・[持ち時間（令和3年5月13日更新版）→](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E6%8C%81%E3%81%A1%E6%99%82%E9%96%93&oldid=83467118)　・[封じ手（令和元年5月30日更新版）→](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E5%B0%81%E3%81%98%E6%89%8B&oldid=72935030)　・[名人（小説）（令和元年5月20日更新版）→](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E5%90%8D%E4%BA%BA_(%E5%B0%8F%E8%AA%AC)&oldid=72816133)・[呉 清源（令和2年5月31日更新版）→](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E5%91%89%E6%B8%85%E6%BA%90&oldid=77801008)

※当ページの最終修正年月日
2021.6.26

## http://kanazawa-sakurada.cocolog-nifty.com/blog/2009/12/20091223-8d79.html2009年12月23日 (水)

### 碁の名手（本因坊秀哉）の引退碁にまつわる歴史対局、本因坊秀哉、木谷実、名人（小説、川端康成）、とは(2009.12.23)

　不世出の名人、２１世**本因坊秀哉**（ほんいんぼうしゅうさい、６４才）は、１９３８年（昭和１３年）、自らの健康と時代の流れを読み取り引退を決意し、**名人引退碁**で、**木谷実**（きたにみのる、２９才）七段（のち九段）と対局しました。この碁は、観戦記を担当した**川端康成**（かわばたやすなり、３９才）の名作、**名人**（木谷実七段は大竹七段として登場）として、１９５４年（昭和２９年）に完成しています。



**小説、名人**（川端康成著、google画像）



**名人引退碁対局**（**左**　木谷実七段、　**右**　本因坊秀哉名人、google画像より）

　**川端康成、**１８９９年（明治３２年）～１９７２年（昭和４７年）、の**観戦記**は、**呉清源、**１９１４年（大正３年）～**、**の解説をもとに、対局光景や勝負師の表情、動作、心理などを流麗な筆致で活写し、それは観戦記というより一個の文学作品であった。

　**観戦記の書き出し**は、棋史を飾るこの日、降り続く梅雨も雷（は）れ間を見せて、青空に渋い夏雲が浮かんでいた。芝公園の紅葉館の庭は、緑が雨に洗われて、蘆（あし）の葉ずれのかすかに聞こえる微風である。対局室は、なんとなく明治が思われるような寂（さ）びのついた二階。十八畳に十五畳の次の間。襖（ふすま）から欄間（らんま）の模様まで紅葉づくめ、一階には光淋（こうりん）描くあでやかな紅葉の金屏風ー稚児髷（ちごまげ）の少女が、白い花簪（はなかんざし）して茶を入れる。名人の白扇が、氷水のコップを載せた黒塗りの盆に写って動く静かさ。観戦は私一人だけだ。

　**小説、名人の書き出し**は、第二十一世本因坊秀哉（ほんいんぼうしゅうさい）名人は、昭和十五年一月十八日朝、熱海（あたみ）のうろこ屋旅館で死んだ。数え年六十七であった。この一月十八日の命日は、熱海では覚えやすい。「金色夜叉（こんじきやしゃ）」の熱海海岸の場、貫一のあのせりふの「今月今夜の月」の日を記念して、一月十七日を熱海では紅葉祭という。秀哉名人の命日は、その紅葉祭の翌日にあたる。

　**本因坊秀哉**（ほんいんぼうしゅうさい、本名、田村保寿）は、１８７４年（明治７年）、東京で生まれ、１０才で方円社に入社、９年後に初段、１９才で一時、方円社を離れ、１７世本因坊秀栄の門に入り、１８９１年（明治２４年）に四段を許されました。１９０８年（明治４１年）、２０世本因坊秀元の推挙により２１世本因坊を襲名、名を秀哉と改め、八段に昇進、１９１４年（大正３年）、史上８人目の名人となりました。

　**名人引退碁**は、東京日日新聞、大阪毎日新聞主催で、１９３８年（昭和１３年）、６月２６日、紅葉館（芝公園、東京）より打ち始め（２回打ち継ぐ）、７月１１日より奈良屋（箱根）に移り、８月１４日までの前半戦（８回打ち継ぐ）は、８月に入って名人が病気のため聖路加病院に入院して中断（白１００のツギ、封じ手）となりました。加療約三ヵ月間の後、後半戦は、１１月１８日より暖香園（伊藤温泉、伊豆）で再開され、１２月１４日の終局まで（５回打ち継ぐ）、実に７ヵ月間に及ぶ長期対局となりました。結果は、**木谷実七段**の**５目勝**で終わりました。

**本因坊秀哉名人引退碁**（先番　木谷実七段、google画像）

**（解説）　前半戦**は、黒１１のノゾキに白１２と押し上げ、名人の気迫が感じられる。白２４，２６も名人の新手らしく、３２の抜きまで必然。黒３３から３７とカケてこの碁の骨格ができた。特に４７のツギは信念の一手。白に４８の大場を占められるものの、鉄壁を背景にした４９が狙いだった。黒６３，６５は下辺の白を固めてどうかと是非の分かれるところだが、遠くから次なる戦闘へ応援しており、木谷流の大胆かつ思い切った構想である。黒６９が苛烈な攻めだった。この手を打つ時、**木谷**は「雨か嵐か」とつぶやいた。**名人**は意表を突かれたらしく、次の７０に１時間４６分も費やし、左辺四子を捨てて本体の安全を図る方針をとった。**立ち会いの小野田千代太郎六段**は、**黒６９**を＜**鬼手**＞、**白７０**を＜**凌ぎの妙手**＞と評したという。白８２が大場の手止まり。黒８３とつめて堅実路線を行く。白８８は本手。黒８９に白９０，９２のツケ切りは手筋、黒９７までは相場らしい。黒９９が、箱根における最後の一手になった。

　**後半戦**は、盤面は大ヨセに入り、中央の白がどの程度まとまるかが勝負。黒１１９に白１２９と引けばアジがいいが、それでは形勢に自信が持てない。**黒１２９**の切り込みが**絶妙手**だった。**白１３０**を利かそうとしたのが**敗着**。（**黒１２１**の封じ手が名人を怒らせ、また動揺させ、そして**白１３０**の運命的な敗着が導き出されたという。）

　白１３２は仕方がない。勝敗の分岐点になったらしき部分を**、川端康成**は次のように描いた。「黒１２９と切った。白のもう片一方を、黒１３３で切って、３目の当り、それから黒１３９まで、当り当りと、ぐんぐん一筋に押して＜驚天動地＞の大きな変化が起きた。黒は白模様の真只中に突入した。私はがらがらと白の陣の崩壊する音が聞こえるように感じた。どこからか上手な尺八の音が流れてきて、盤面の嵐がわずかにやわらげた」。

　**本因坊**の**名跡**（３００年伝承）は、１９２４年（大正１３年）に創設された**日本棋院**に**、**また**碁譜**の**掲載権**は**毎日新聞**に**委譲**され、**本因坊戦**という名の**タイトル戦**が誕生しました。本因坊戦が順調に発足進行し始めた頃、**秀哉名人**は、昭和１５年（１９４０年）１月１８日、６７才、熱海で静養中に亡くなりました。

　２００６年（平成１８年）１２月１９日、**朝日新聞**（朝刊）に、「昭和の伯楽」**木谷九段**、没後３１年、との**木谷道場**を主催して数多くの俊秀を育てた木谷九段の偉業を讃える**特集記事**が出ています。

　**木谷実**（関連年譜）は、１９０９年（明治４２年）、神戸市生まれ、１９２１年（大正１０年）、１２才、上京、鈴木為次郎に入門、１９２４年（大正１３年）、１５才、設立された日本棋院に初段で参加、１９３３年（昭和８年）、２４才、呉清源と新布石研究、１９３８年（昭和１３年）、２９才、本因坊秀哉名人引退碁、１９５７年（昭和３２年）、４８才、第２期最高位、１９５８年（昭和３３年）、４９才、第３期最高位（防衛）、１９７５年（昭和５０年）１２月１９日、６６才、自宅（平塚市、神奈川）で逝去。

　**木谷実の歩み**は、年譜の通りで、新布石を打ち出して現代囲碁に革新をもたらし、時の第一人者、本因坊秀哉名人の相手を務め、この対局はのち、川端康成の名作「名人」に結実しました。勝負では、最高位決定戦（１９５５年、昭和３０年～１９６１年、昭和３６年）で２連覇したが、３度挑戦した本因坊位の獲得は成らなかった。

　**木谷実の弟子**は、戦前の１９３３年（昭和８年）からとり始め、１９７０年（昭和４５年）入門の日高敏之八段（日本棋院離脱）まで計５４人で、孫弟子まで含めた一門の合計段位は５００段に達し、２０００年（平成１２年）に記念の会が開かれました。

　**木谷一門のすごさ**は**、**弟子の多さだけではなく、囲碁界を代表する棋士が多く輩出したことにあり、２０年ほど前には一門で七タイトルを独占していました。**三大タイトル**（棋聖、名人、本因坊）を**獲得**した**７人**（大竹英夫、石田芳夫、加藤正夫（故人）、趙治勲、小林光一、武宮正樹、小林覚）はじめ、多くの木谷門下の棋士が現在も活躍中です。

（参考文献）　川端康成：　名人、新潮文庫（１９６２）；　井口昭夫；　本因坊名勝負物語、三一書房（１９９５）；　菊池達也：　木谷實とその時代、棋苑図（２０００）；　「昭和の伯楽」木谷九段、没後３１年：　朝日新聞（朝刊）特集、２００６年（平成１８年）１２月１９日（火）．

（参考資料） **囲碁の歴史、昭和初期の碁**（日本棋院、市ヶ谷、千代田区、東京）：　<http://www.nihonkiin.or.jp/lesson/knowledge/history07.htm>；

  **本因坊秀哉**（第２１世本因坊、名人、google画像）：　<http://images.google.co.jp/images?sourceid=navclient&hl=ja&rlz=1T4GGIH_jaJP278JP279&q=%E6%9C%AC%E5%9B%A0%E5%9D%8A%E7%A7%80%E5%93%89&um=1&ie=UTF-8&sa=N&tab=wi>；

　**木谷実**（日本棋院、七段（のち九段）、google画像）：　<http://images.google.co.jp/images?sourceid=navclient&hl=ja&rlz=1T4GGIH_jaJP278JP279&q=%E6%9C%A8%E8%B0%B7%E5%AE%9F&um=1&ie=UTF-8&sa=N&tab=wi>；

　**木谷實・星のプラザ**（平塚市、神奈川）：　<http://www.totalmedia.co.jp/works/works2005_kitani.html>．

　**日本棋院**（市ヶ谷、千代田区、東京）：　[http://www.nihonkiin.or.j](http://www.nihonkiin.or.jp/)

2009年12月23日 (水) [**●　囲碁（起源、棋話、歴史対局、儀式、遊び、近代碁、世界棋戦）**](http://kanazawa-sakurada.cocolog-nifty.com/blog/cat52212828/index.html) | [**固定リンク**](http://kanazawa-sakurada.cocolog-nifty.com/blog/2009/12/20091223-8d79.html)

[« 漆器（石川）にまつわる歴史技法、漆の採取、輪島塗、山中塗、金沢漆器、とは(2009.12.23)](http://kanazawa-sakurada.cocolog-nifty.com/blog/2009/12/20091223-c984.html) | [トップページ](http://kanazawa-sakurada.cocolog-nifty.com/blog/) | [法然（浄土宗、開祖）の流刑（土佐、讃岐に変更）にまつわる歴史実話、専修念仏、建永（承元とも）の法難、とは(2009.12.28) »](http://kanazawa-sakurada.cocolog-nifty.com/blog/2009/12/20091228-da2b.html)

## 「[●　囲碁（起源、棋話、歴史対局、儀式、遊び、近代碁、世界棋戦）](http://kanazawa-sakurada.cocolog-nifty.com/blog/cat52212828/index.html)」カテゴリの記事

* [囲碁、井山七冠、（4月20日）、前人未到の七冠（名人、棋聖、本因坊、王座、天元、碁聖、十段のタイトル）独占、将棋、羽生永世七冠、とは（2016.5.6)](http://kanazawa-sakurada.cocolog-nifty.com/blog/2016/05/post-89ef.html)(2016.05.06)
* [囲碁、第４回電聖戦、小林光一名誉棋聖vsコンピュータソフト（３子局）は1勝1敗、日本のＺｅｎ（ゼン）は勝ち、米のdarkforest（ダークフォレスト）は敗け、とは(2016.3.26)](http://kanazawa-sakurada.cocolog-nifty.com/blog/2016/03/vs11facebookdar.html)(2016.03.26)
* [囲碁、アルファ碁（グーグルの人工知能）　と 李世ドル九段（世界最強レベルの棋士）が対局、李世ドル（イセドル）九段は５番勝負の第４戦でようやく１勝、とは(2016.3.19)](http://kanazawa-sakurada.cocolog-nifty.com/blog/2016/03/vs-a0a6.html)(2016.03.19)
* [囲碁、はじめての天元の局、江戸時代、のち天文学、貞享暦（太陰太陽暦）の大家、安井二世算哲が必勝を期して、本因坊四世道策と対局、９目敗け、とは(2016.2.2)](http://kanazawa-sakurada.cocolog-nifty.com/blog/2016/02/post-f46e.html)(2016.02.02)
* [アルファ碁（囲碁ソフト）、人工知能(AI)により膨大な過去データで打ち方自習（ディ－プラーニング）、世界で初めてプロ棋士（欧州王者、二段）破る！、とは(2016.1.29)](http://kanazawa-sakurada.cocolog-nifty.com/blog/2016/01/post-255e.html)(2016.01.29)